

## 夜明け前が最も暗い

先週の月曜日に、藍田勝郎さんが突然、天に召されまして、今朝、わたしたちはいわく言い難い気持ちを抱えての礼拝出席であろうと思います。葬儀は水曜日でしたが、その日にも祈禱会が行われ、翌日は婦人会のクリスマスと予定されていた行事を行いました。集ってきた人々が少しずつ感情をこぼして分かち合い、担いあい、励ましあい、祈りあって、本日の聖日礼拝を迎えたと認識しています。

その水曜日の祈禱会の時に、担当だった榎本弘子さんが元旦礼拝の説教「欺かざる希望」からいくつか引用をされました。自分の説教なのですが、そういう表現をしたかしらと思って、読み返してみましたところ、今朝の聖書個所の洗礼者ヨハネの迷いといいますか、つまづきといいますか、それについて示しが与えられる表現があったので、今朝はそれに触れながら御言葉の説き明かしをしたいと思います。

元旦礼拝の聖書個所は「わたしたちは知っています。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」でした。苦しみや悩みの日が訪れたとき、それは否応なく忍耐の始まりとなります。苦しみや悩みが一瞬で解決されることはないからです。一瞬で解決するなら、それは苦難ではない。ですから、苦難は必然的に忍耐の日々をわたしたちにもたらします。では洗礼者ヨハネの場合はどうだったでしょう。彼は「荒れ野で呼ばれる者の声」として、ヨルダン川で洗礼運動をおこし、主のために準備された民を用意した人です。ナザレから出てきたイエスさまも彼の手から洗礼を受けました。その

あと洗礼者ヨハネのことは殆ど記されませんが、ヘロデ王を厳しく咎めた結果、捕らえられてしまう。ヨハネの人生はこの獄中で終わるのです。やがて宴会の余興として殺されてしまう。そういう終わりを予期していたかは分かりませんが、自由に活動できなくなって、なにしろ獄中ですから考える時間だけはたっぷりあるわけです。そこで外から入ってくるナザレのイエスの噂を聞くにつけ、本当にこの人をメシアとして指し示して良かったのか、不安になった。そこで弟子を送って「来たるべき方はあなたでしょうか。それとも他のだれかを待たねばなりませんか」と問わせた。ここには神ならぬ人間のもつ揺らぎが率直に記されています。自分がしてきたことは正しかったのかという思いは、正直な人、誠実な人には必ずついてまわるものでしょう。獄に囚われ、もう取り返しがつかなくなってから、自分のしてきたことは御心に背いたものだったのではないかと考えることは恐ろしい。これが洗礼者ヨハネを襲った苦難であり、忍耐の日々の始まりでした。これが「欺かざる希望」に到達するのか、迷いのなかで不安を抱えて朽ちていくのか、忍耐が練達、すなわち苦難の日々の中で実らされる品格や品性を養って、希望にいたるのか、それとも、忍耐が練達にいたらずに、不安のなかで他者や社会への恨み言や呪いとなって根腐れしてゆき、絶望にいたるのか、この分かれ道が存在すると思うのです。元旦礼拝でわたしは次のように語っていました。

「現実に苦難があり、忍耐の日々があり、その忍耐の一日一日が耐えがたく重い。その時に自分を支える救命ロープのような言葉や、他人の手助けというものがあるだろう。聖書の御言葉もそれを差し出しています。しかし、そこでその御言葉を、御心ですから、と自分に与えられた杯として受け入れるのか、こんなのは嫌だ。別の杯に変えてくれ、というのか。こういう終

わり方、解決の仕方はわたしの望むそれではない、と突っぱねることもありうる。苦難が忍耐を求め、忍耐が、しかし、最後まで自分の希望通りの、というよりも自分の願望通りの解決を願って（差し出された杯を）拒み続ければ、それはやがて絶望という事態にいたるのではないか。つまり、自分を主として、自分を神として、自分中心の解決を希望してそれ以外は認めないで生きる場合、人間は、自分が神のように完全でないことにつまづいてゆく。状況の支配者ではなく、状況に翻弄されるものであることを思い知らされて絶望してゆく。（しかし）そういうあなたに主が寄り添っておられること、何よりも主ご自身が行きたくない場所に連れてゆかれ、あざけられて、殺されることをわたしたちのために良しとされた神の子であったことを重ね合わせるとき、どうして、それ以上のことをわたしは要求できるだろうか。苦難がわたしの頑なな自己を砕き、わたしを御心のままに作り替えてゆくことを承認した時に、わたしの問題はわたしの手を離れて、神さまの御手のうちに置かれていく。こういう説き明かしでした。

「夜明け前が最も暗い」状態は、この自分で堂々巡りをしている状態を指します。自分を御言葉に委ねる。主に委ねる道を見いだせば、問題は神さまの御手のうちに置かれる。主が共に担って下さる重荷に変わります。洗礼者ヨハネはまさにその道をたどりました。「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と、イエスさまにお訊きしたのです。彼の目には理解できないほどに大きな出来事が起きている。何が進行しているのかよく分からない。だから、それを主に問うた。あなたなのですか、あなたでよいのですかと。コヘレトの言葉のなかに「神はすべてを時宜にかなうように作り、また永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、

神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない」(コヘレト3:11)という御言葉があります。これは人間が弁えるべき真理ですね。その限られた枠組みの中で、わたしたちは懸命に生き、与えられた働きに仕え、しかもなおこのように迷うものであることを洗礼者ヨハネは教えてくれています。そしてここが分かれ道です。洗礼者ヨハネは、自分とはとんでもない勘違いをしていたのではないかと自らを疑ったとき、その暗闇から、光にむかって手を伸ばしたのです。主の御前に出たのです。わたしたちが礼拝に出る。御言葉に聴く姿勢は、わたしたちではなく、主を崇め、この方の光の中でわたしを作り変えてゆく姿勢に他ならない。そして、その思いにイエスさまはきちんと応答されます。ヨハネの弟子たちに「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている、わたしにつまづかない人は幸いである」というお言葉を託された。このときイエスさまが洗礼者ヨハネに与えた言葉はイザヤ書からの引用でした。これも大切です。イエスさまもいつも御言葉と対話をしておられた。わたしたちの助けは天地を創られた主のもとから来るのです。だから御言葉をもって返された。人間の言葉ではない。預言者イザヤの残した神の言葉から、あなたが獄中で聞き、迷いのもととなった出来事を判断しなさい。つまづくな、と返されたのです。苦難は忍耐を、忍耐や練達を、練達は希望を生むというルートに預言者イザヤの御言葉を糧として与えられて洗礼者ヨハネが至ったかどうかを福音書記者マタイは記しません。それは彼自身の問題です。一方で、イエスさまの洗礼者ヨハネに対する評価は揺るぎません。彼が迷ったからと言ってその偉大さは少しも傷つけられない。むしろ、洗礼者ヨハネが誠実だから

こそ、律法の時代の最後に立ち会い、福音の時代の始まりに立ち会った人物だからこそ、彼の先駆者としての栄光と限界をよくご存じで、それにふれています。

「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国でもっとも小さな者でも、彼よりは偉大である。～すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである」、そう人々に説明をなさった。

わたしは、この洗礼者ヨハネの最後のエピソードが好きです。今回、あらためてそう思いました。それは最も偉大だとされる人間にすら、この弱さ、揺らぎがある。わたしたちが迷うのも無理はないと思うからです。しかし、それだけではない。ここは本当に大切な、深い真理を含んでいて、もう少し踏み込んで表現しますと「肉と血は神の国を受け継ぐことは出来ず、朽ちる者が朽ちないものを受け継ぐことは出来ません」(第一コリント 15 章 50 節)と御言葉に言われていることが、真実だと教えられるからです。それは表現が難しいのですが、神さまの出来事を、肉と血の人間の延長線上で理解することは出来ないし、してはならないという境界線を示している。「預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時まで」とイエスさまは表現なさった。この境界線を越えることができるのは、ただ神の恵みによる以外はないと理解することが信仰の命なのです。これが分かれ道なのです。それは出発点を自分自身から、神の恵みに移すことを意味しています。神さまが、イエスさまによって、わたしのために何をして下さったかを出発点とすることです。これ以外を自分の上におかず、主の言葉と約束に聴くことです。そこで人格と人生を形作ることです。洗礼者ヨハネの苦難は、思えば、この神の恵みそのものであるキリスト・イエスの十字架と復活を知らずに役割を終えていくことです。先駆者の限界はそこに

あります。旧約以来、ずっと手渡されてきたバトンをもって懸命に走ってきた洗礼者ヨハネは、イエス・キリストのなしていることが、これまでのイスラエルに対する神さまのなさりようから、彼がこうあるべきと考えているものとは違っていたから迷った。だがそれでよい。それが人間というものだ。しかし、神は、そうしたわたしたちを用いて働かれるのです。そしてバトンは手渡される。ヨハネからイエスへ、イエスからペテロを始めとする弟子たちへ。そしてわたしたちへ。すべての預言と律法を凌駕する恵みの出来事として、キリスト・イエスの福音が宣べ伝えられ、生きられてゆく。こうして、今、ここに半田の信徒たちの群れが形作られている。そうした多くの信仰の先達、証し人の群れに囲まれて、いまのわたしたちがあるのです。それが神の御心にかなう業であるならば、神は必ずその働きを継ぐ者を起こして下さいます。このことを覚え、感謝をもって主の御名を崇めます。

お祈りいたします。